

高崎市文化財調査報告書第 281 集

菅谷・村東遺跡 4

—看護・介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2011

高崎市教育委員会

菅谷・村東遺跡 4

—看護・介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2011

高崎市教育委員会

目 次

例言・凡例・目次

I.	調査に至る経緯	1
II.	調査の方法と経過	1
	調査の方法	1
	調査の経過	1
III.	遺跡の地理的・歴史的環境	2
	地理的環境	2
	歴史的環境	2
IV.	基本土層と旧地形の復元	5
V.	調査した遺構と出土遺物	5
	(1). 壁穴住居跡	5
	(2). 土坑・ピット	8
	(3). 井戸跡	8
	(4). 溝跡	9
	(5). 重複溝群	9
VI.	まとめ	18
	写真図版	
	発掘調査報告書抄録・奥付	

挿図目次

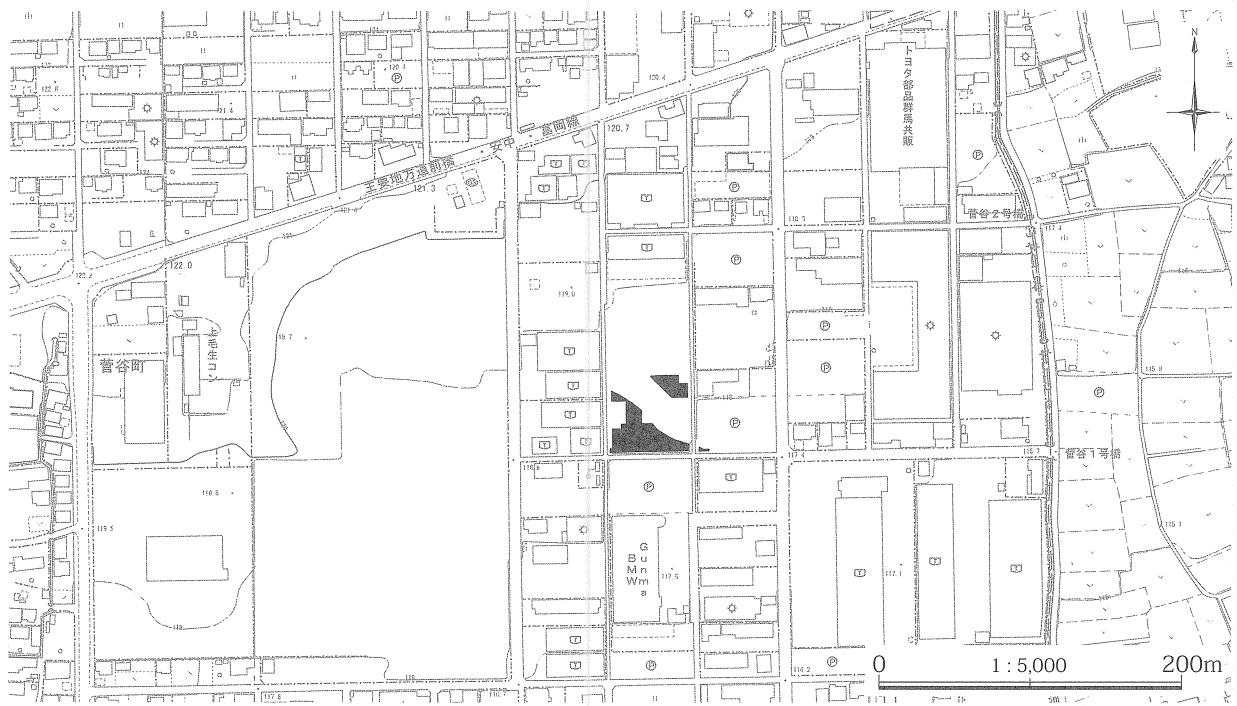
第 1 図	周辺の遺跡
第 2 図	調査区の位置
第 3 図	調査区全体図
第 4 図	基本土層図
第 5 図	SI-1～3 平面・断面
第 6 図	SI-4・5 平面・断面
第 7 図	SI-5 ピット断面・SI-6・7 平面・断面
第 8 図	SI-8・9 平面・断面
第 9 図	SI-10・11 平面・断面
第 10 図	SK-1～19 平面・断面
第 11 図	SK-20・21・23・27～32・SE-1 平面・断面
第 12 図	SD-1・2・重複溝群平面・断面
第 13 図	SI-1～7 遺物
第 14 図	SI-8～11 遺物
第 15 図	SI-9・SK・SD・遺構外遺物

表目次

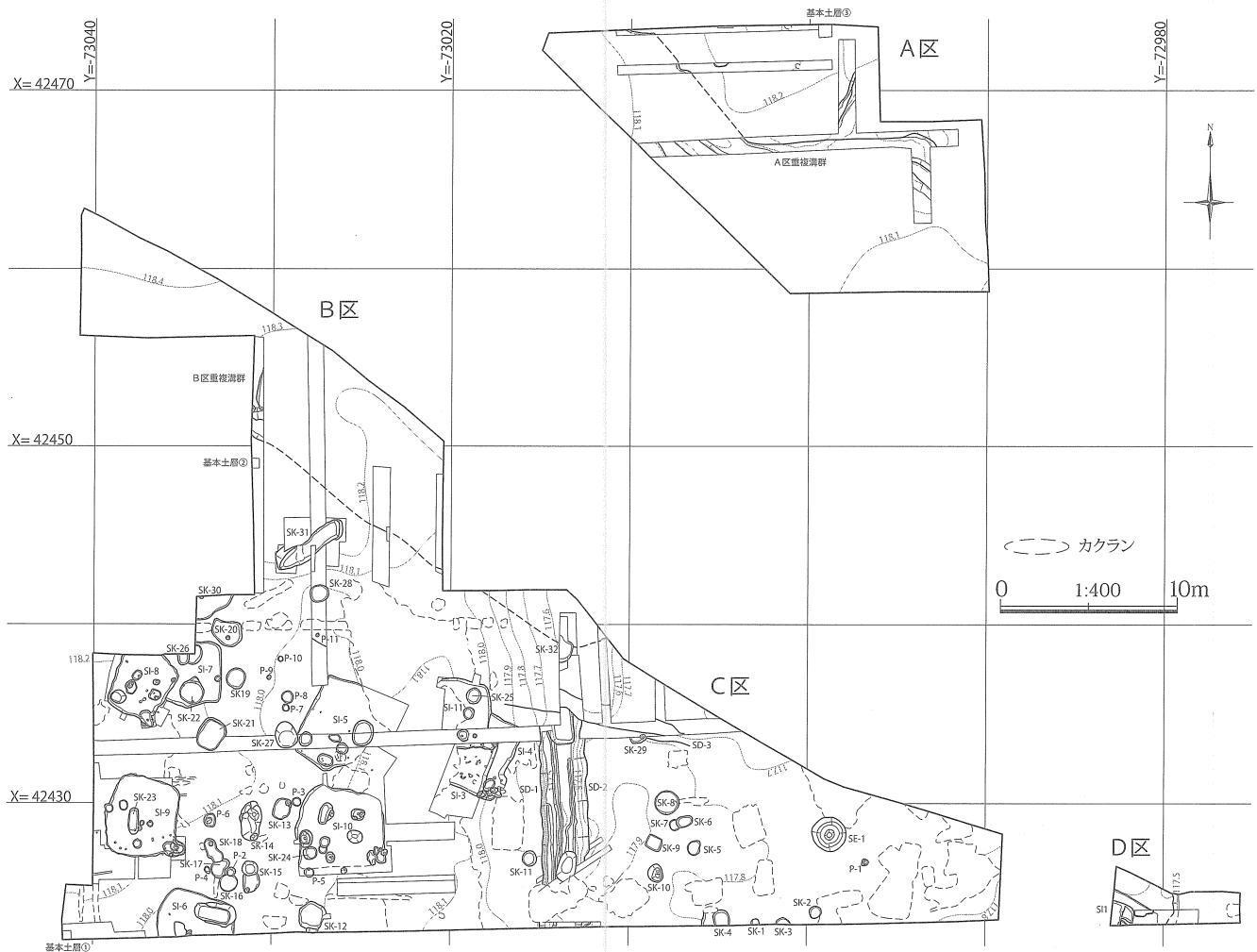
第 1 表	土坑計測値など一覧表
第 2 表	遺物観察表（1）
第 3 表	遺物観察表（2）

写真図版目次

図版 1	調査区全景（上が北） 調査区鳥瞰（北西を望む／奥が榛名山） 調査前現況（南東から） SI-1・2 全景（西から） SI-3 全景（南から）
図版 2	SI-4 全景（北西から） SI-5 全景（北西から） SI-6 全景（西から） SI-7 全景（南から／SK-23 を含む） SI-8 全景（北西から） SI-8 カマド全景（北西から） SI-8 カマド遺物出土状況（西から） SI-9 全景（西から）
図版 3	SI-9 カマド全景（西から） SI-10 全景（西から） SI-11 全景（北西から） SE-1 全景（南から） SD-1・2 全景（北から） SK-14 周辺（南西から） A 区南トレーンチ断面（南東から） A 区北トレーンチ断面（南東から）
図版 4・5	遺物写真



第2図 調査区の位置



第3図 調査区全体図

2号住居跡（SI-2／遺構：第5図・遺物：なし）

位置（座標） D区南東隅（X=425・Y=-982付近） 重複関係 SI-1より古い。 平面形態 全形不明。方形か。
規模 東西 2m86cm（検出長）・南北 48cm（残存長）・深度 15cm程度 主軸方位 N-119°-E 所見 本遺構は調査区外へと連続し、且つSI-1によって壊されるため、北壁と床面の一部を検出したのみである。床面は平坦であり、顕著な起伏は認められない。周溝・柱穴は検出されなかった。 カマド 検出されなかった。調査区外に存在すると推測する。 出土遺物 出土遺物は皆無であった。

3号住居跡（SI-3／遺構：第5図・遺物：第13図）

位置（座標） C区中央（X=430・Y=-020付近） 重複関係 SI-11より古く SI-4より新しい。 平面形態 全形不明。方形か。 規模 東西 2m29cm（残存長）・南北 2m60cm（残存長）・深度 23cm程度 主軸方位 N-111°-E 所見 本遺構の西側は搅乱によって壊され、北側にはトレンチがある。本遺構の北壁はトレンチ内に該当したと考えられる。床面は地山面を使用しており比較的平坦であるが、緩い起伏がわずかに認められる。硬化もわずかである。周溝・柱穴は検出されなかった。また、本遺構の調査時点では認識できなかったが、北側にはSI-11が存在しており、本遺構とは一部重複状態にある。本遺構床面の状況からみて、SI-11が新しいと判断している。 カマド 検出されなかった。東壁以外に付設された可能性もあるが、確認できない。 出土遺物 土師質土器壺（5・6・7）、羽釜（8）、土釜（9）、須恵器甕（10）を図示した。前述したように、SI-11は本遺構より新しいと考えられるものの、調査過程では認識できなかったため、本遺構の帰属として取り上げた出土遺物の中には、SI-11に帰属するものが含まれていると考えられる。図示遺物では（7・8）の2点がSI-11に帰属する可能性が高い。

4号住居跡（SI-4／遺構：第6図・遺物：第13図）

位置（座標） C区中央（X=430・Y=-017付近） 重複関係 SI-11・SI-3より古い。 平面形態 全形不明。長方形か。 規模 東西 1m93cm（残存長）・南北 4m49cm・深度 24cm程度 主軸方位 N-114°-E 所見 本遺構の西側大部分はSI-3・11によって壊され、北東隅部分にはトレンチがある。床面は地山面を使用しており、わずかに硬化する。平坦気味ながらも緩い起伏がある。周溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴も判然としないが、カマド南脇のピットが該当するであろうか。 カマド 東壁最南部に付設される。ほぼ南東隅にあたる。残存状態は不良で、袖部も検出されなかった。焚口部は断面皿状にくぼむ。火床の被熱痕跡は確認できず、灰層の堆積も認められない。 出土遺物 羽釜（11・12）、土釜（13）、須恵器甕？（14）を図示した。

5号住居跡（SI-5／遺構：第6・7図・遺物：第13図）

位置（座標） C区中央やや南寄り（X=435・Y=-024付近） 重複関係 なし。 平面形態 全形不明。長方形か。 規模 東西 2m78cm・南北 5m18cm・深度 13cm程度 主軸方位 N-119°-E 所見 本遺構の東側は大規模搅乱によって壊され、トレンチが東西方向に横切る。床面はほぼ平坦な地山面であり、硬化はやや強い。周溝は検出されなかった。床面には複数のピットが検出されたが、P2は本遺構より新しい。それ以外は本遺構に伴うと判断したが、柱穴として明確なものは無い。P1のように大きな掘り込みもあり、床下土坑に相当するものも含まれている可能性がある。一方、土層断面の観察からは、本遺構の東側に重複遺構が存在する可能性を考えた。大規模搅乱によって平面的な確認ができず、詳細は明らかにできなかった。 カマド 検出されなかった。おそらく東壁に付設されていたと思われる。 出土遺物 土師質土器壺（15）、土師質土器壺（16）、須恵器壺（17）、須恵器甕（18）を図示した。

6号住居跡（SI-6／遺構：第7図・遺物：第13図）

位置（座標） C区南東隅付近（X=425・Y=-036付近） 重複関係 なし。 平面形態 全形不明。長方形か。

きた。壁面の残存も不良であり、南壁はまったく残されていない。平面図上の南壁推定ラインは、カマド残痕の位置から推定したものであり、その根拠は乏しい。床面では複数のピットが検出されたが、本遺構に伴うものかの判断はつけ難い。しかし、明らかに本遺構より新しいピット・土坑以外は、本遺構に伴うものとみなした。その中でもP4の底面には扁平な自然礫が据え置かれており、礎板石と考えられる。ただしこれに対応するピットは、本遺構内外ともに検出されなかった。周溝は検出されず、貯蔵穴に該当する掘り込みも不明である。カマド 東壁の南寄りに焼土が多く分布する部分があり、これをカマド残痕と推測した。搅乱小穴によって壊されており、本来的な形状は全く不明である。出土遺物 調査段階では本遺構の覆土と搅乱土との見分けがつけにくかったため、本遺構出土遺物には搅乱層中に帰属するものが含まれていると考えられる。土師質土器壺(49・50・51)、羽釜(53・54)、土釜(55)、土師質土器小型壺?(56)、須恵器壺(52)、須恵器甕(57)、磨石(58)を図示した。

11号住居跡(SI-11／遺構：第9図・遺物：第14図)

位置(座標) C区中央(X=435・Y=-021付近) 重複関係 SK-25より古く、SI-3・4より新しい。平面形態 全形不明。方形か。規模 東西2m99cm(残存長)・南北3m78cm・深度40cm程度 主軸方位 N100°-E 所見 本遺構の西側は搅乱によって壊され、西壁を完全に滅失している。南壁と並行する位置にはトレンチがある。床面は基本的には地山面を使用しており、その硬化はやや強い。床面上からはP2を検出した。P1はトレンチ底面からの検出であるが、位置的にみて本遺構に伴うと判断した。貯蔵穴であろうか。さらにP1東隣のピットも本遺構に伴う可能性がある。周溝は検出されなかった。本遺構はSI-3・4と重複状態にあるが、SI-3床面の状況からみて本遺構の方が新しいと判断している。ただし調査段階では重複の認識が無かったことから、カマドを含めてSI-3との調査順序に齟齬があった。カマド 南東隅に付設される。トレンチと重なるため、全体的な形状は不明である。さらに、SI-3覆土中に掘り込まれていた可能性が極めて高いが、先述のように調査順序の齟齬があったため、燃焼部のみの記録となった。火床の被熱痕跡は認められず、灰の堆積も確認できない。

出土遺物 羽釜(59)、砥石(60)を図示した。SI-3で図示した(7・8)は本遺構のカマドに帰属する可能性が高い。

(2) 土坑・ピット(遺構：第10・11図他・遺物：第14図)

今回の調査では土坑32基、ピット11基以上が検出された。土坑の詳細は第1表を参照されたい。ピットの分布はC区西側に点在し、明確な配列は認められない。土坑の分布ではC区に集中しているが、その中央、東側は遺構密度が薄い傾向にある。覆土ではAs-C混入の土坑が大半を占める。中にはロームブロックが多量に含まれるものもあり、SK-21・23などは埋め戻された可能性もある。As-B混土の土坑についてはSK-30のみで、C区北西隅に検出されている。明確にAs-A混入の土坑は無かった。また、SK-29の覆土は焼土ブロックを多く含み、当初カマドの可能性を考えた。しかし、底・壁面には被熱痕跡、灰などは無く、至近に竪穴住居跡のプランも見出せない事から、その可能性は低いと思われる。各土坑の平面形態は多様であるが、円形基調が多い。断面形態には齊一性がなく、底面は比較的平坦気味のものが多い。遺構の掘り込みは浅いものが主であるが、C区西側に深めの土坑が集中傾向にある。遺物はSK-17・22からの出土が目に付く以外は、少量かつ小破片である。

殆どの土坑の帰属時期は覆土からみて平安時代を推定した。竪穴住居跡を切るSK-22～26は相対的に新しい。

(3) 井戸跡

1号井戸跡(SE-1／遺構：第11図・遺物：第14図)

位置(座標) C区東(X=429・Y=-998付近) 重複関係 なし 平面形態 円形 規模 長軸1m97cm・短

軸 1m86cm・深度 1m27cm 所見 断面形態は上部が大きく開く漏斗状である。開口部から深さ 60cm 程で一旦テラス状となり、直径 30cm 程の底面に向い筒状に窄まる。井戸枠等の痕跡は無く、土層断面にも現われなかつた。至近にはピットが無く、上屋等の施設も無かつたと思われる。當時 50cm 程溜まる湧水があり、確認面から 70cm 程が湧水面になる。 出土遺物 土師器坏 (61・62)、須恵器坏 (63)、須恵器壺 (64・65)、須恵器丸底壺 (66)、古式土師器 S 字甕 (67) を図示した。

(4) 溝跡

1・2・3 号溝 (SD-1・2・3 / 遺構: 第 17 図・遺物: 第 15 図)

SD-1・2 は C 区中央南壁からの南北方向の溝である。走行方位は同じ N-3°-W となり、覆土は同じ As-B 混土なので中世以降の溝と考えられる。重複関係では SD-1 の方が新しく、SD-2 の埋没後に掘り直したのではないかと思われる。両溝は直線的で幅がほぼ均一であるが、南側は調査区外、北側は SD-3 付近で不明瞭になる。検出した規模は SD-1 が残存長 11m10cm・幅 1m34cm・深度 49cm 程度である。SD-2 は残存長 12m46cm・残存幅 1m64cm・深度 42cm 程度である。断面形態は SD-1 が緩い「W」字状に似て、底面の下端両側は浅い溝状を呈する。底面は多少凹凸がある。SD-2 の立ち上がりは東側が緩やかであるが、西側は SD-1 により壊され不明である。底面は主に平坦であるが細かな凹凸がみられる。両溝の底面には流水痕跡などが無く区画溝の可能性もある。出土遺物は SD-1 が須恵器・土師器などがあり、SD-2 は土師器・平瓦・青磁などであり、共に小破片が出土している。このうち SD-2 出土の平瓦 (75) を図示した。

SD-3 は東西方向の溝で、型紙摺印判手の碗が出土しており近代以降と考えたので、平面の記録のみに留めた。

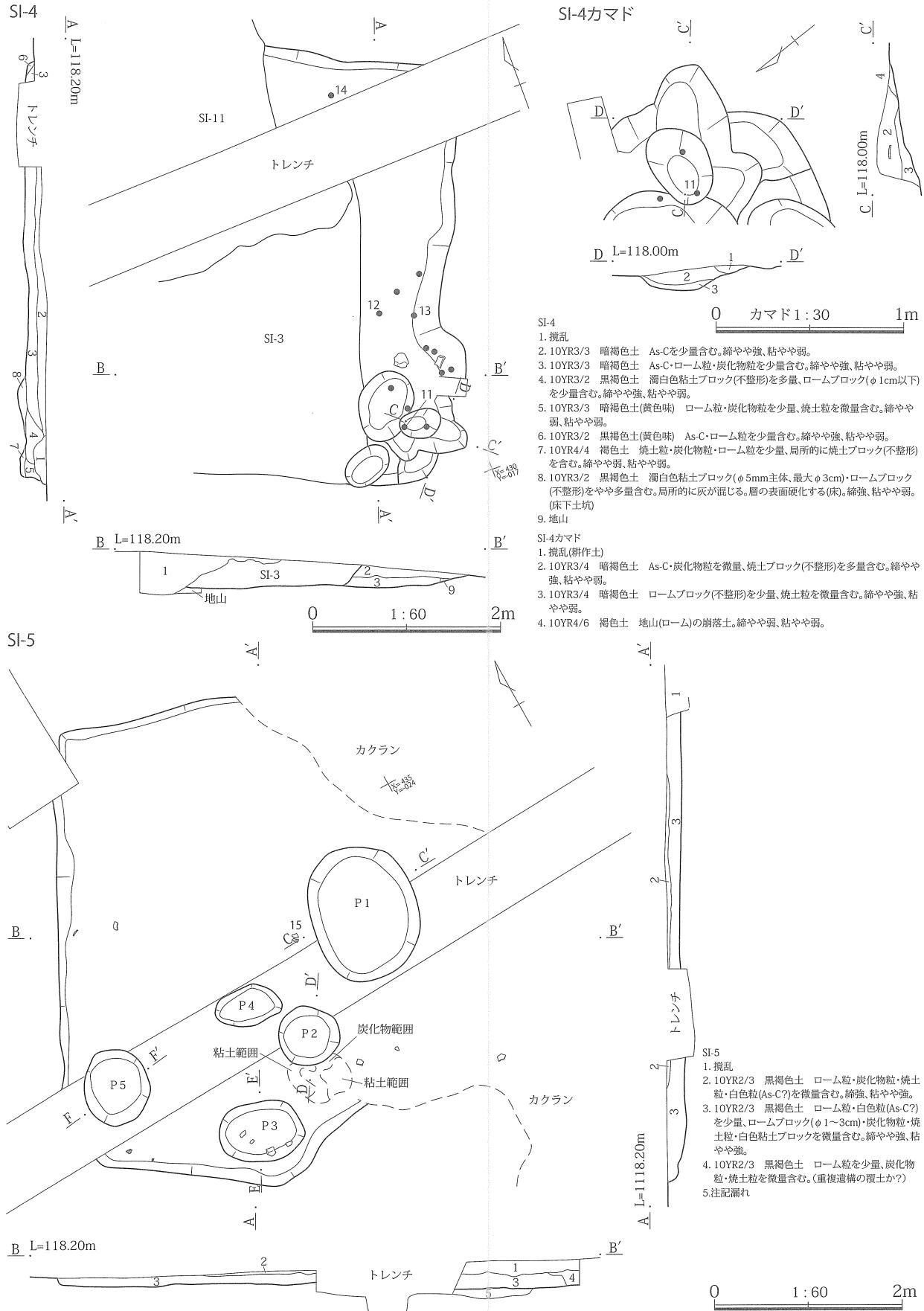
(5) 重複溝群 (遺構: 第 17 図・遺物: 第 15 図)

A・B 区に相当する位置では、試掘時に地形の落ち込みが確認されていた。この落ち込みは「埋没谷」であろうと想定されていたが、調査の結果、近世以降に開削された溝が複数条重複したもの、と判断するに至った。

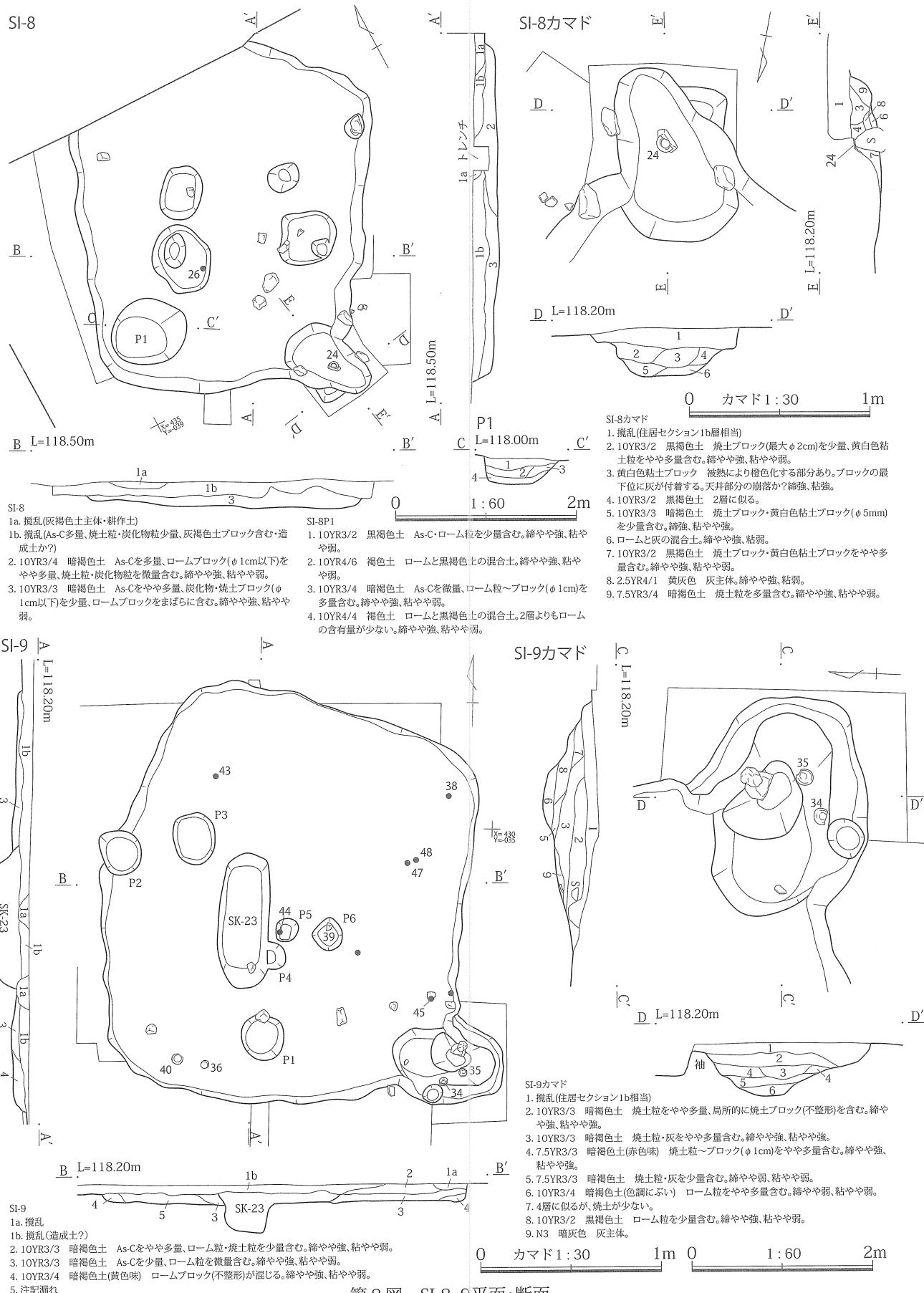
A 区北側トレンチの土層断面観察では、「地形の落ち込み」と想定された部分が地山である As-C を含む黒色土層を掘り込んでいる状況を確認した。この部分では、地山層自体が自然的に低位へと落ち込む状況は認められない。よって、「埋没谷」と想定された地形の落ち込みは、人為的に掘り込まれた遺構であると判断できた。覆土は灰褐色砂質土であり、As-B 混土と認識した。遺構全体を完掘することはできなかったが、A 区南側トレンチの土層断面で観察したように、複数条の溝が重複したものであることがわかった。全体は明らかにし得ないものの、平面的にも A 区北側トレンチ内のように重複溝の存在を認めることができる。出土遺物は極めて少なく、各溝への帰属も不明な点があるが、溝の中～下層で近世陶磁器が、上層では現代陶磁器が出土している。下層において近現代遺物の出土が無かつたことから、これらの重複溝は近世以降に開削され、掘り直しを伴いながら現代まで機能したと推測しておきたい。廃絶時期については、上層出土遺物の中に軍用食器とおぼしきクロム釉絵付けの湯呑茶碗が含まれており、旧陸軍前橋飛行場造成時であった可能性がある。また、溝の底面付近には流水を示す細砂礫層の堆積があり、上層位の重複溝も細砂粒で埋没していることから、用水路としての機能を想定する。出土遺物中から平瓦 (76)・近世陶磁器 (77・78・80)・軍用食器の可能性もある現代磁器 (79) を図示した。

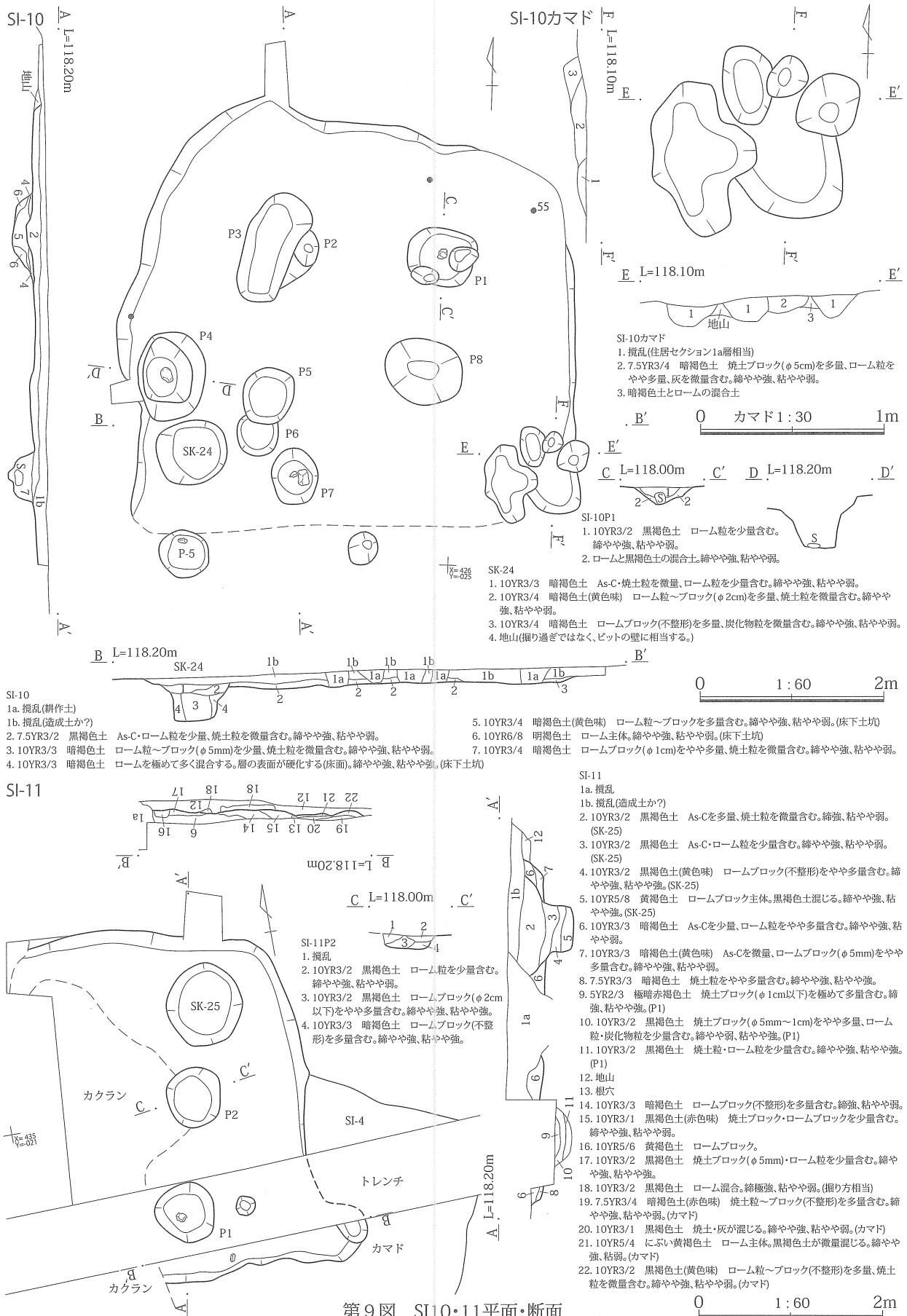
B 区の「埋没谷」部分でも、A 区同様に地山が掘り込まれる状況を確認でき、人為的な遺構であると判断することができた。トレンチ内の土層断面観察部分には搅乱土坑が重複していたため、普遍的な埋没状況の確認はできなかつたが、As-B 混土で埋没する溝である。流水痕跡は認められず、出土遺物も皆無であった。

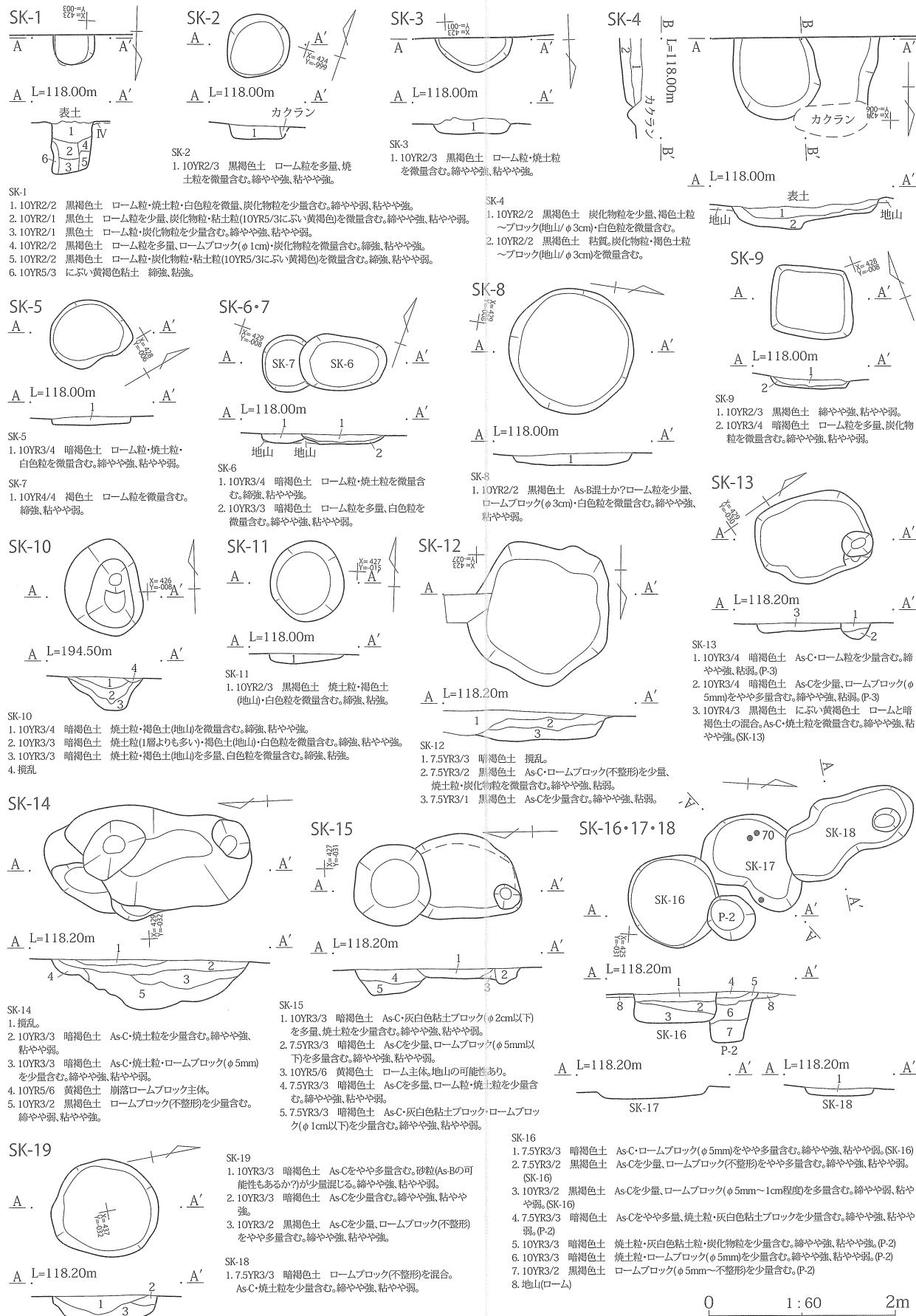
A・B 区間には調査区外部分が広く存在するため、両調査区で検出した溝が直接的に関係するかは不明である。仮に両者を一連の重複溝とみれば、その上幅は 30m 前後を測る大規模な遺構となる。しかし、こうした規模は考えにくい部分があり、且つ覆土中の流水痕跡の相違を考慮すれば、A・B 区で検出したそれぞれの溝に直接的



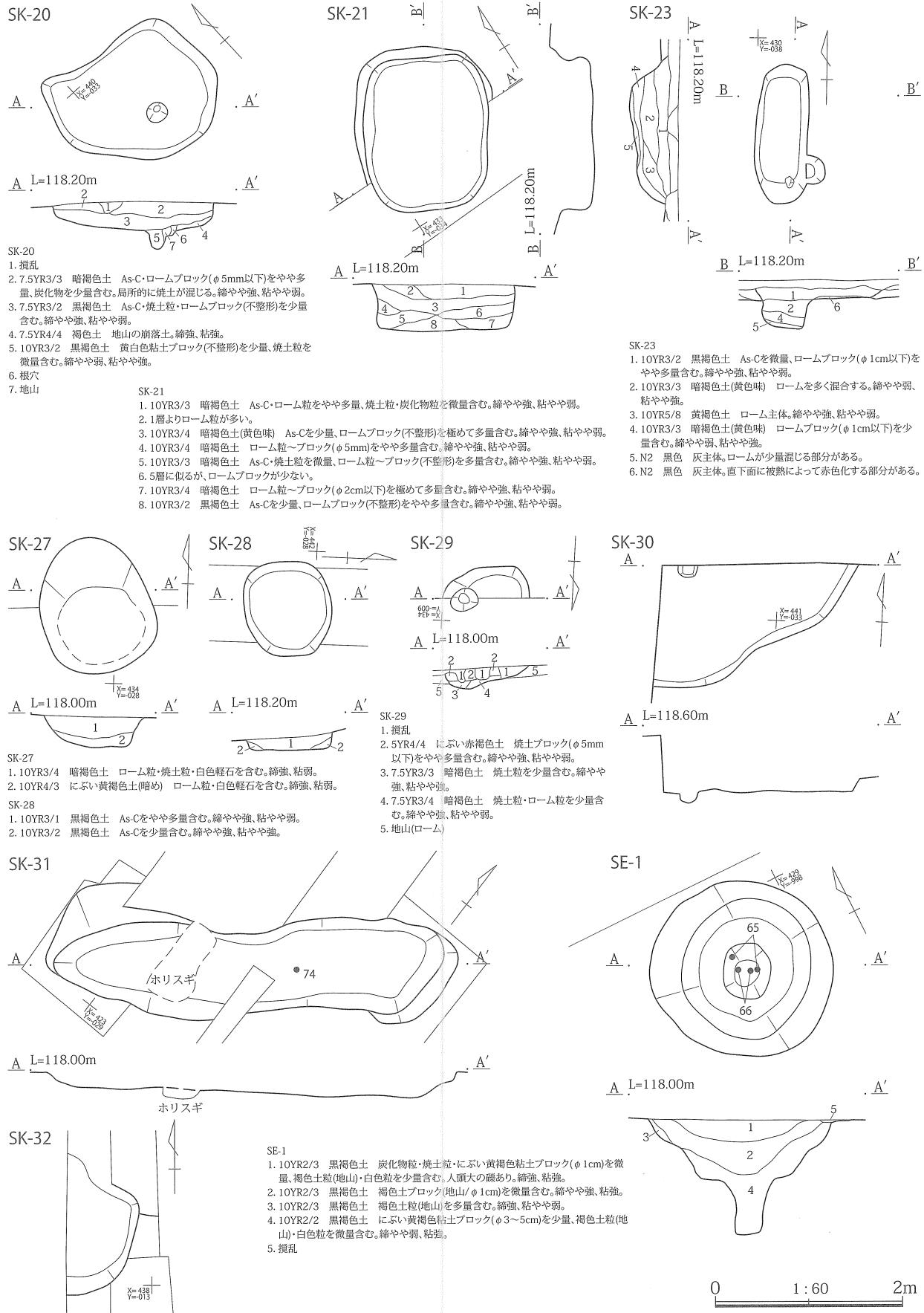
第6図 SI-4・5平面・断面



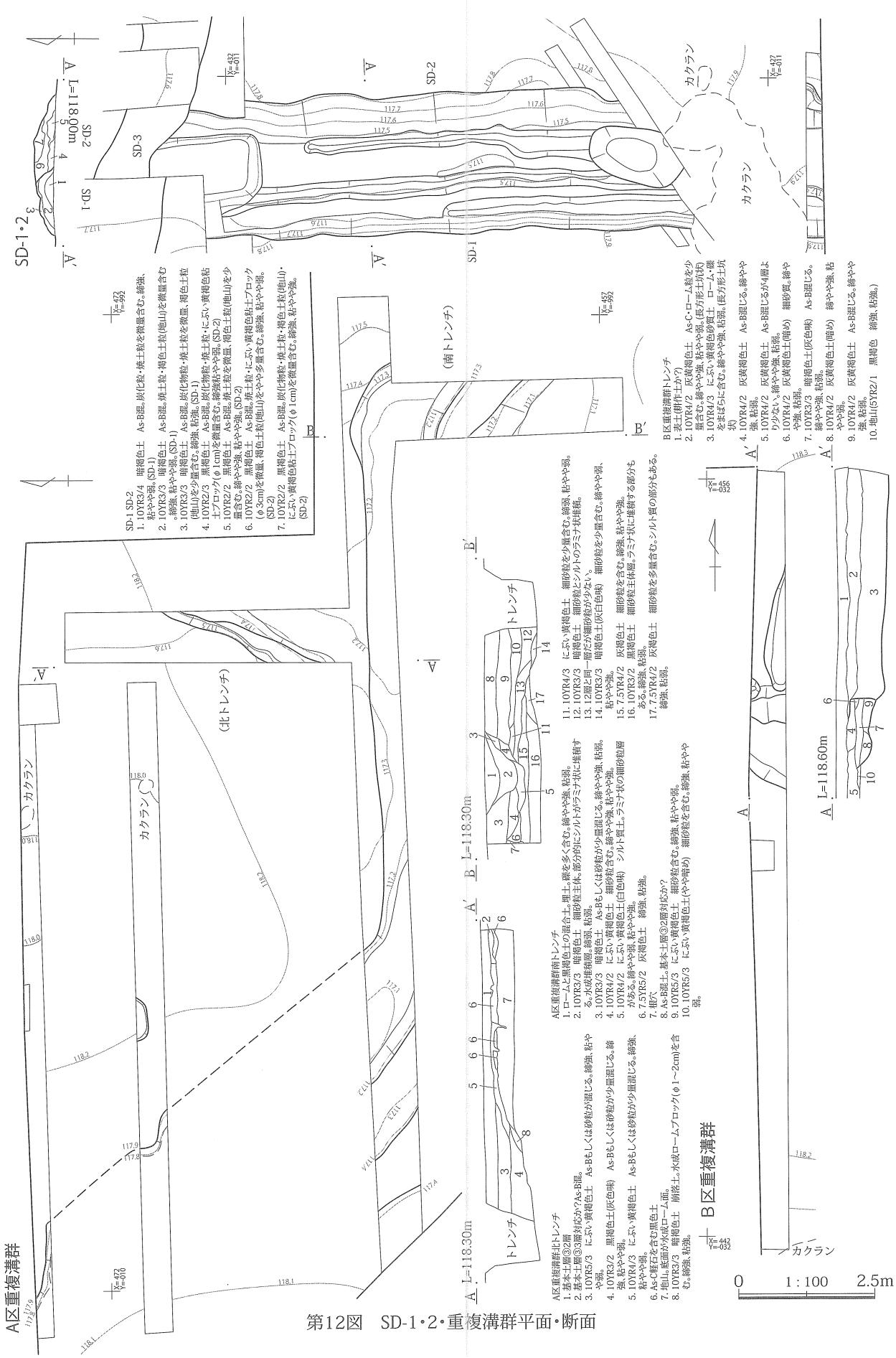


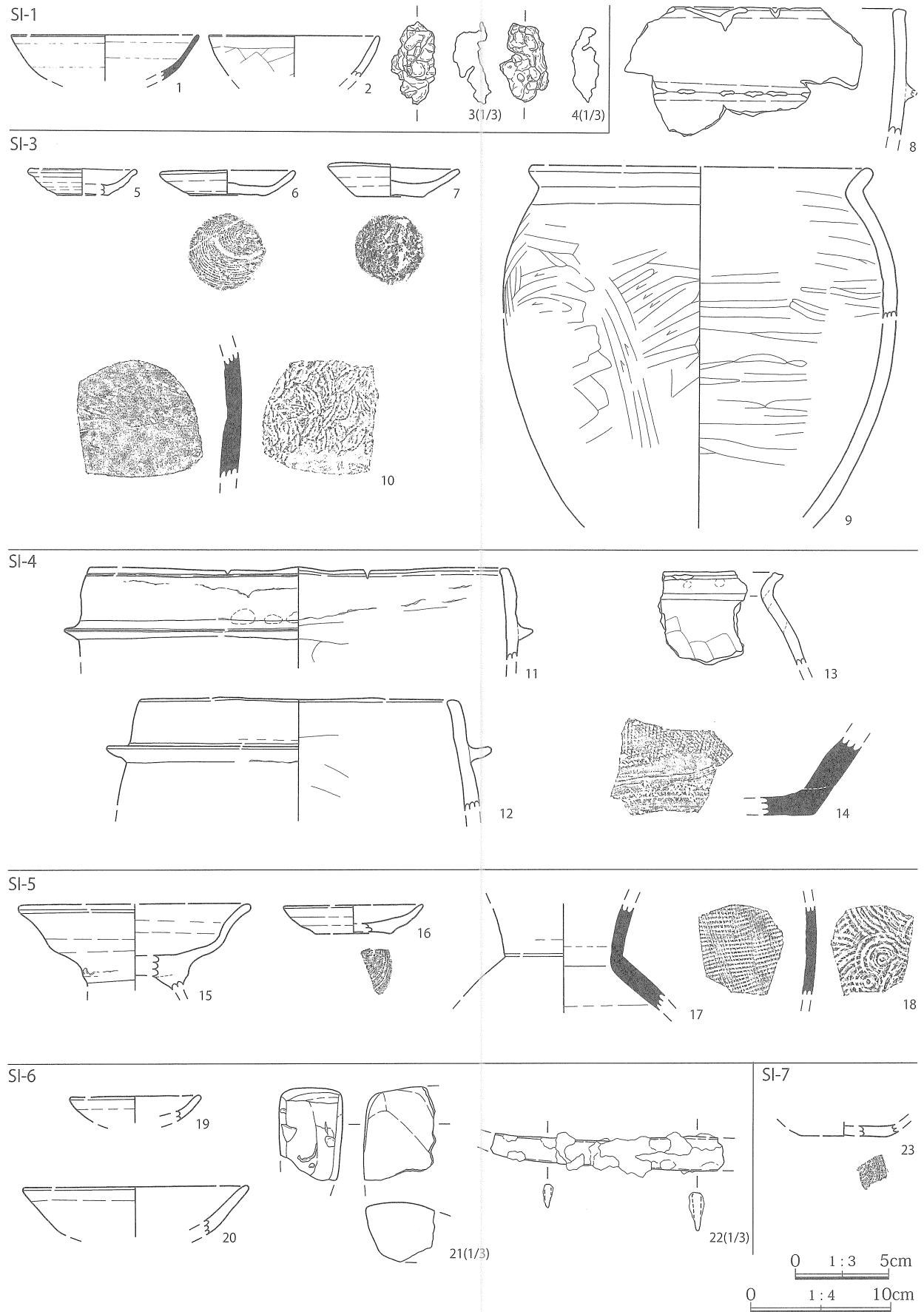


第10図 SK-1～19平面・断面

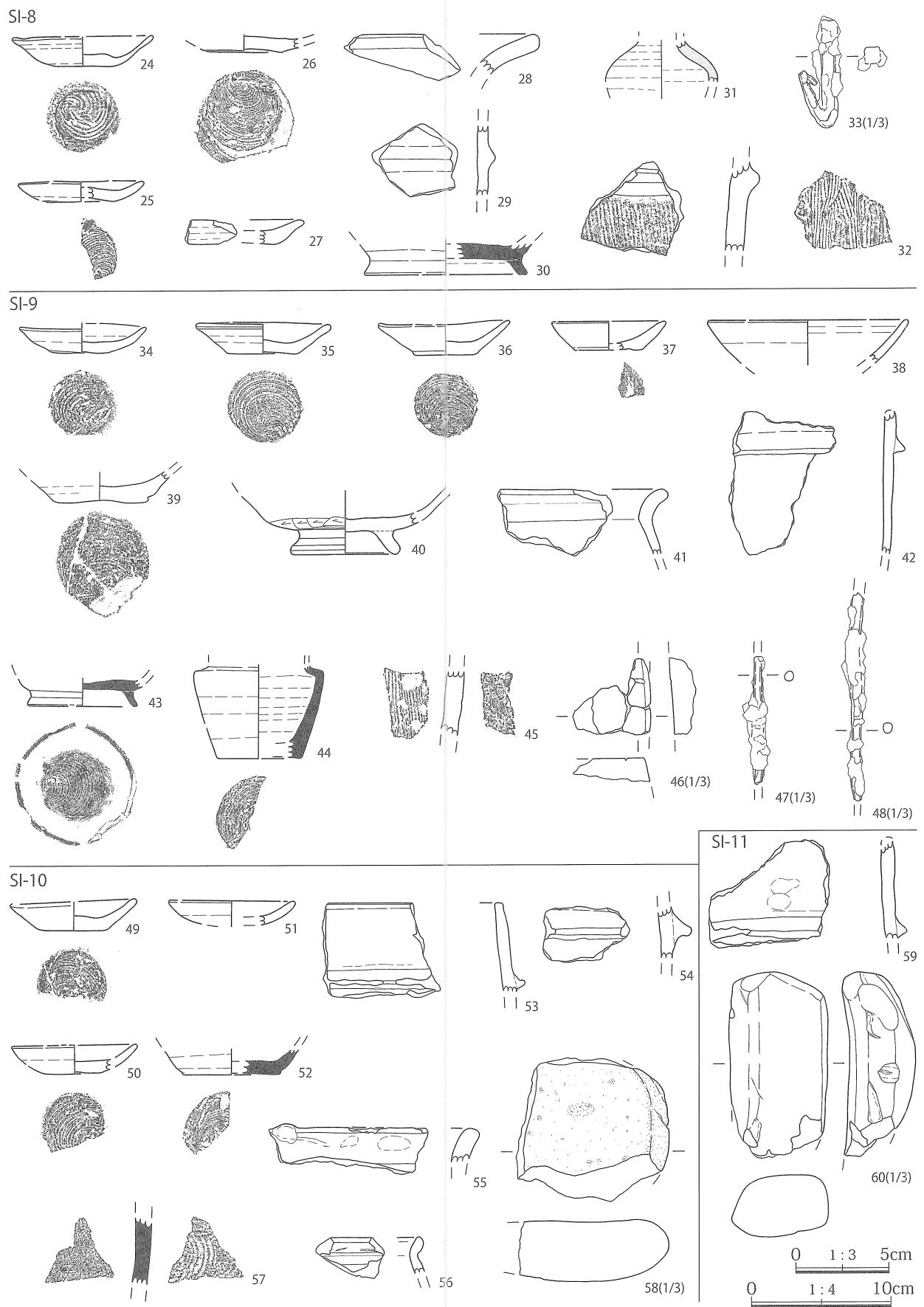


第11図 SK-20・21・23・27~32・SE-1平面・断面



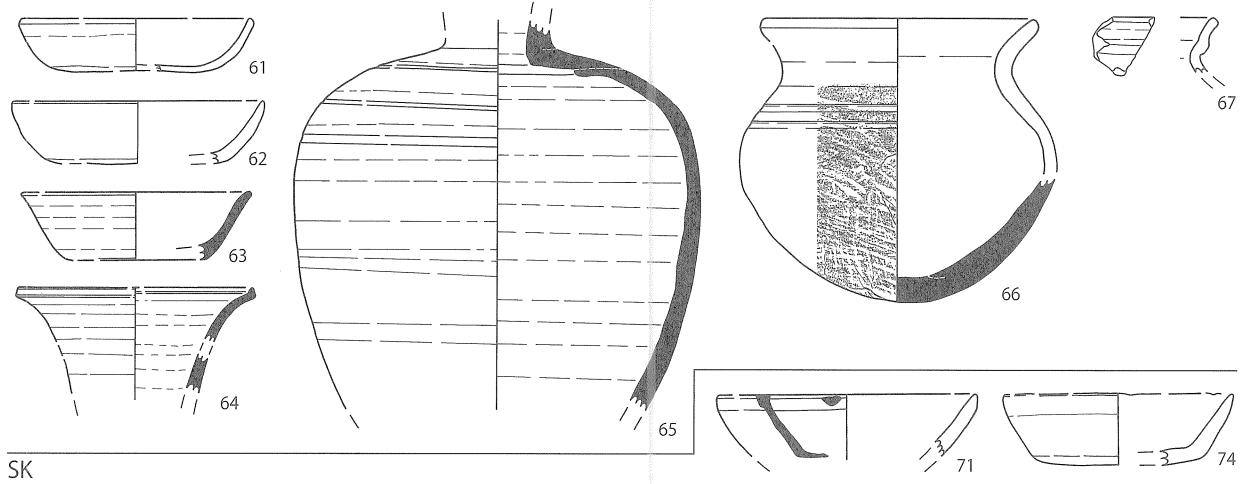


第13図 SI-1～7遺物

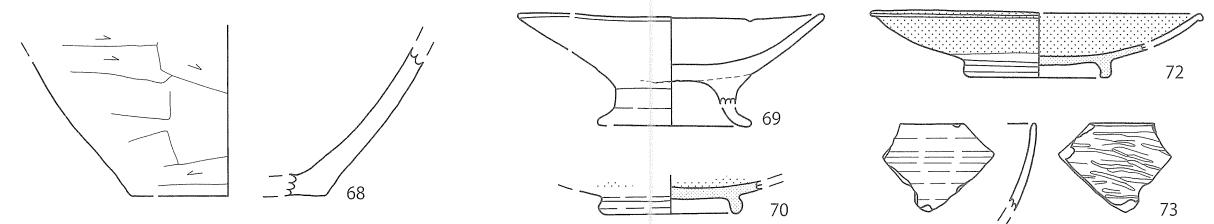


第14図 SI-8~11遺物

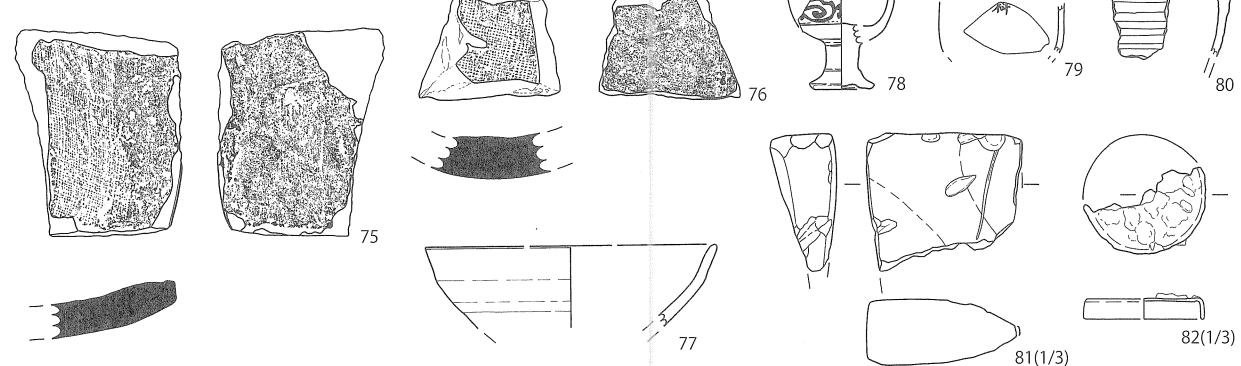
SE-1



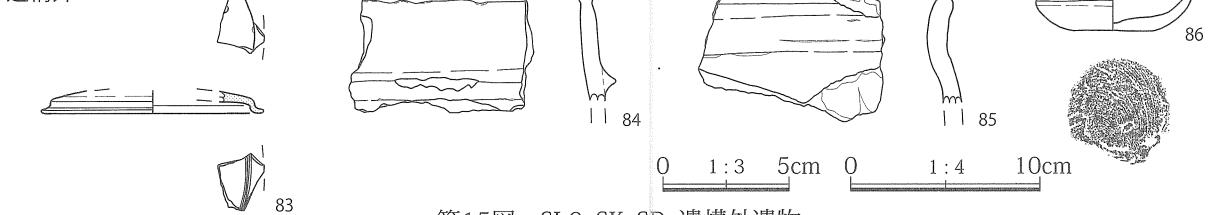
SK



SD



遺構外



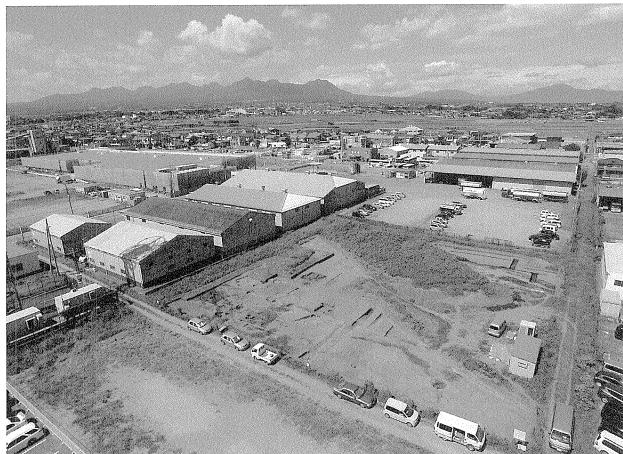
第15図 SI-9・SK・SD・遺構外遺物

第2表 遺物観察表（1）

番号	遺構	出土位置	種別・器種	計測値		焼成	色調	残存状況	成・整形方法の特徴など
				口径・底径・器高 (cm)	() 残存 [] 復元 < > 推定				
1	SI-1	覆土	須恵器・环	[13.4] · · (3.2)	還元	黄灰色	口縁部破片	内・外面：ロクロ整形。	
2	SI-1	覆土	土師器・环	[12.2] · · (2.9)	酸化	褐色	口縁部破片	外面：口縁部横ナデ、体部斜位ヘラケズリ。内面：ナデ	
3	SI-1	覆土	鉄滓	長 4.4cm・幅 2.4cm・厚 1.4cm・重 20.1g			完形	青味のある黒色で、赤褐色の酸化部分が多い。表面に流动性がある。	
4	SI-1	覆土	鉄滓	長 4.1cm・幅 2.4cm・厚 1.3cm・重 17.8g			完形	青味のある黒色で、赤褐色の酸化部分が多い。表面に流动性がある。	
5	SI-3	覆土	土師質・环	(7.8) · (3.7) · 1.9	酸化	褐色	口縁～底部破片	内・外面：ロクロ整形。	
6	SI-3	床	土師質・环	9.7 · 5.5 · 1.8	酸化	にぶい黄褐色	口縁 1/2欠	内・外面：ロクロ整形。底部左回転糸切り。	
7	SI-3	覆土	土師質・环	9.4 · 5.0 · 2.4	酸化	黄橙色		内・外面：ロクロ整形。底部調整不明。	
8	SI-3	覆土	羽釜	· · · (9.3)	酸化	暗褐色	口縁部破片	外面：ナデ・鈎貼り付け。内面：ナデ。	
9	SI-3	床・覆土	土釜	[24.6] · · (26.1)	酸化	赤褐色	口縁～胴部	外面：ヘラケズリ。内面：ヘラナデ。	
10	SI-3	覆土	須恵器・甕	· · · (8.9)	還元	灰色	胴部破片	内面：当て具痕。	
11	SI-4	覆土	羽釜	[29.8] · · (7.3)	酸化	にぶい褐色	口縁 1/4 残	外面：ナデ・鈎貼付後接着部上位を指オサエ。内面：ヘラナデ？	



調査区全景（上が北）



調査区鳥瞰（北西を望む／奥が榛名山）



調査前現況（南東から）

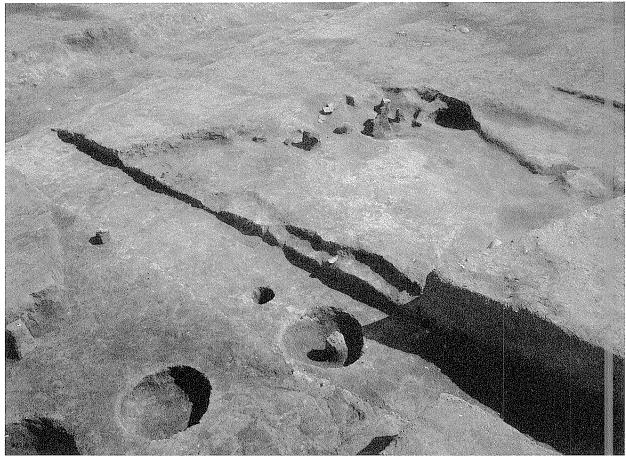


SI-1・2 全景（西から）

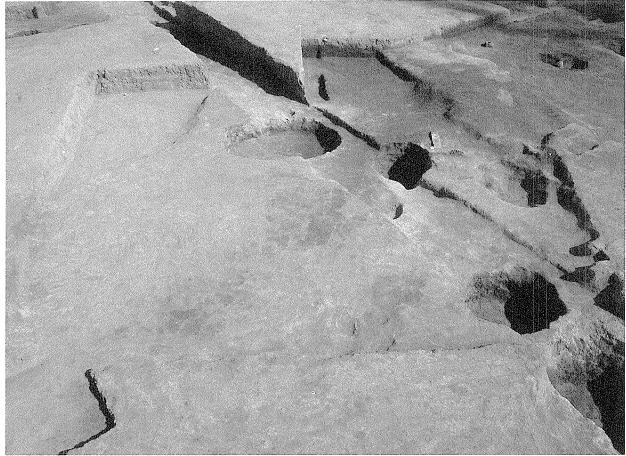


SI-3 全景（南から）

写真図版2



SI-4 全景 (北西から)



SI-5 全景 (北西から)



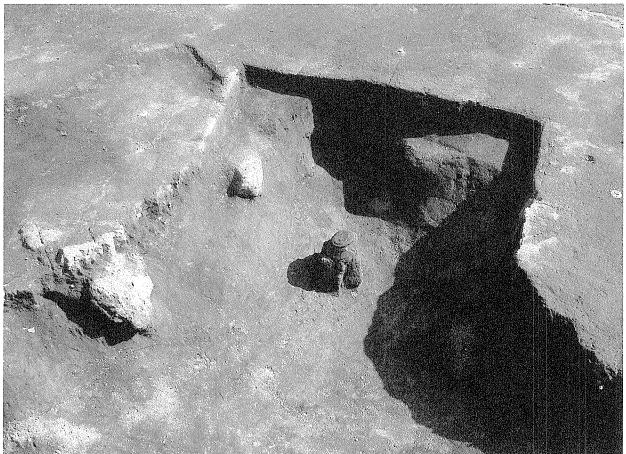
SI-6 全景 (西から)



SI-7 全景 (南から／SK-23 を含む)



SI-8 全景 (北西から)



SI-8 カマド全景 (北西から)

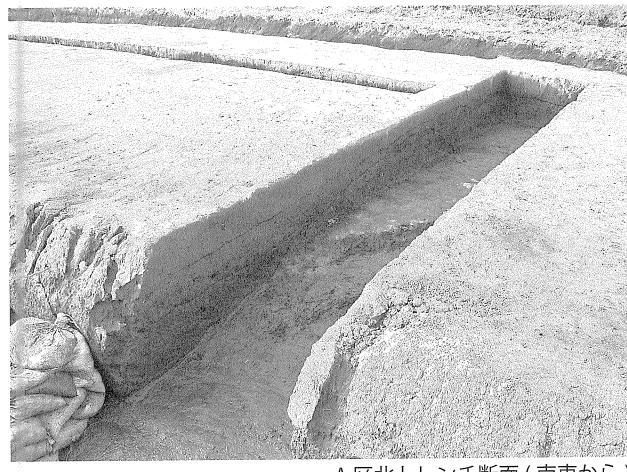
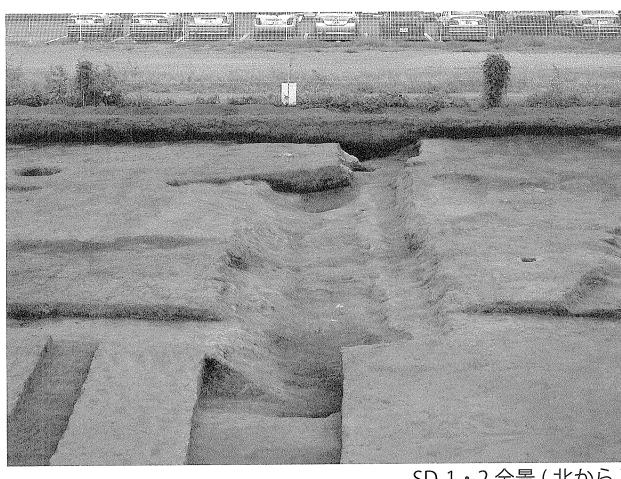
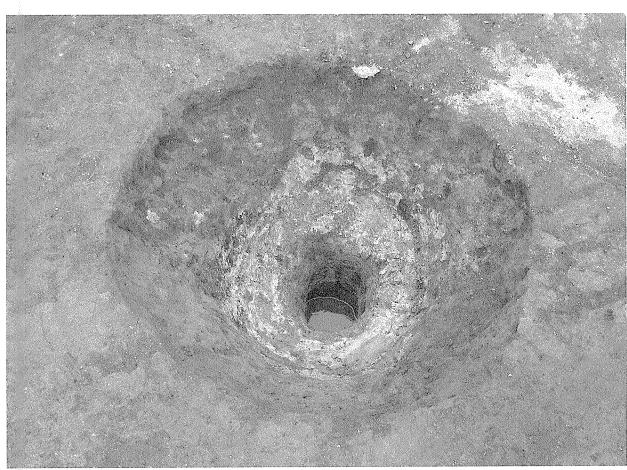


SI-8 カマド遺物出土状況 (西から)



SI-9 全景 (西から)

写真図版 3

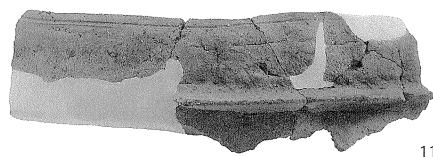


写真図版4

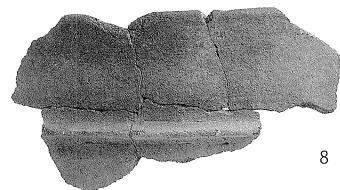
SI-1



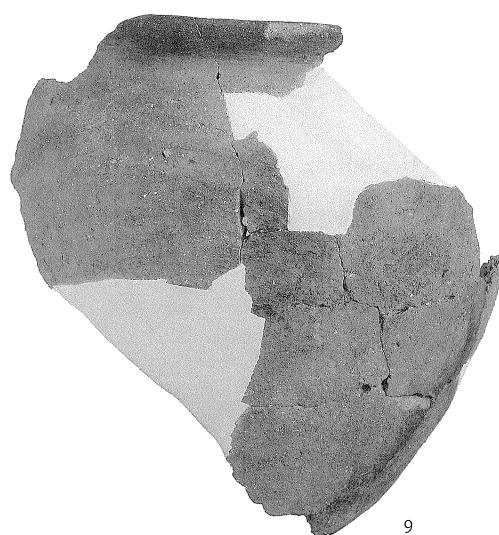
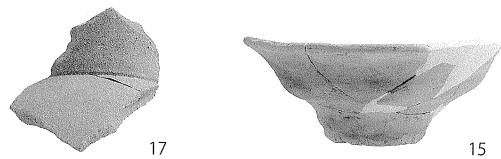
SI-4



SI-3



SI-5



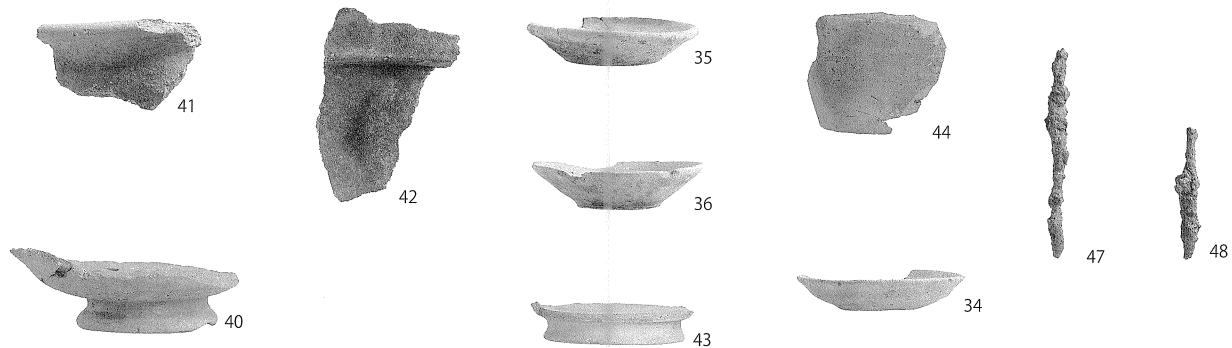
SI-6



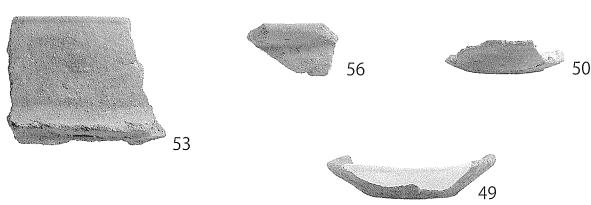
SI-8



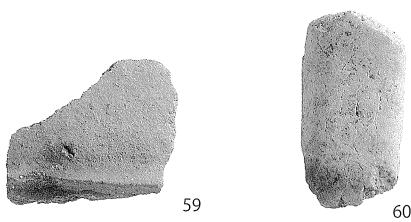
SI-9



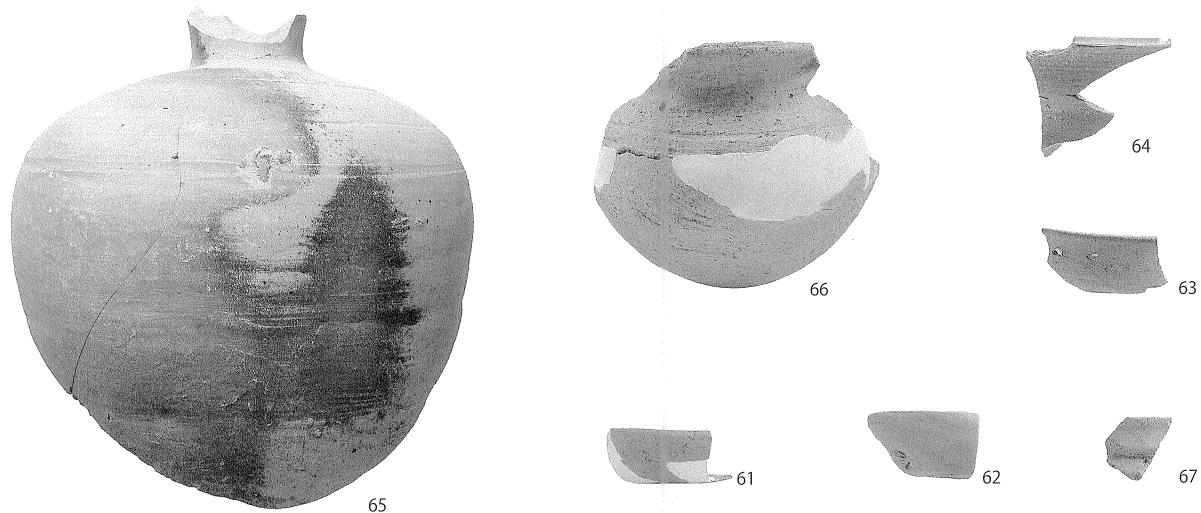
SI-10



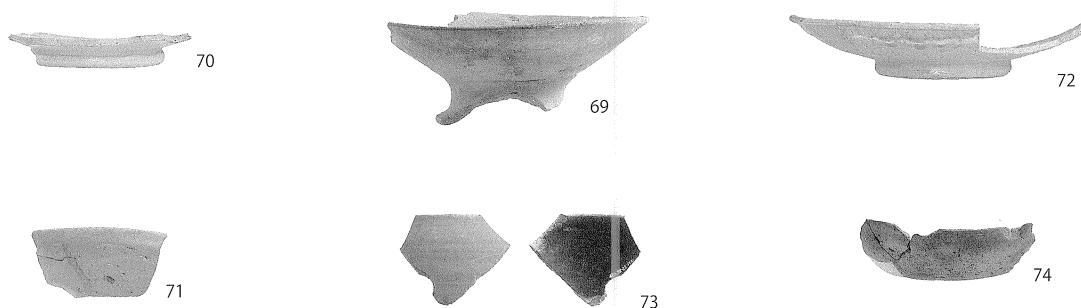
SI-11



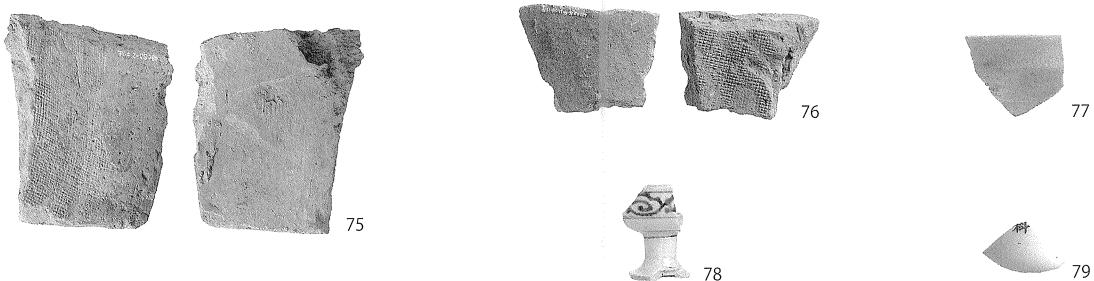
SE-1



SK



SD



遺構外



発掘調査報告書抄録

ふりがな	すがや・むらひがしいせき 4
書名	菅谷・村東遺跡 4
副書名	看護・介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
卷次	一
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 281 集
編著者名	水谷 貴之 (編) 山崎 悟
編集機関	高崎市教育委員会
所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町 35 番地 1 TEL 027-321-1292
発行年月日	2011 年 4 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すがや・むらひがし 菅谷・村東 いせき 遺跡 (第4次)	たかさきしそがやまちあざ 高崎市菅谷町字 むらひがし 村東20-187他	10202	480	36° 22' 47"	139° 01' 10"	2010.07.26 ～ 2010.09.18	約1,182m ²	看護・ 介護施設 建設

所 収 遺 跡 名	種 别	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
菅谷・村東遺跡 (第 4 次)	集落	平安時代 中・近世以降	竪穴住居跡、 土坑、井戸、 ピット、溝	土師器、須恵器、 口クロ使用酸化 焰焼成土器、灰 釉陶器、鉄製品、 石製品、陶磁器	平安時代の集落跡を調査した。9～11 世紀代と考えられる。出土遺物は全体的に少ない。

要 約	本遺跡では平安時代の集落跡を調査した。竪穴住居跡の帰属時期は9世紀代が2軒、10世紀後半(末)～11世紀代が9軒と考えられる。井戸跡は9世紀代である。土坑については平安時代の帰属と判断したが、不明瞭な部分が多い。溝跡は全て中世以降であり、重複溝群は近世～現代まで機能したと推測した。 本遺跡での調査成果では、9世紀代の遺構は客体的であり、10～11世紀代の遺構が主体をなしている。周辺での調査事例は蓄積途上にあるものの、9世紀から10世紀へと移行する時期に集落占地の移動があったと予測したい。推定上野国府周辺という立地条件をふまえれば、この時期の集落占地の実態は興味ある事象としてとらえられる。
-----	--

高崎市文化財調査報告書第281集

菅谷・村東遺跡 4

—看護・介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成23年4月21日 印刷

平成23年4月28日 発行

編集・発行 高崎市教育委員会

印 刷 上海印刷工業株式会社